

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関や各フロアの見やすい箇所に掲示して会議の中でも毎月振り返る機会を設けている。	11年前の現在の法人に合併時より、法人の理念を掲げ活動している。事業所の各所に掲示し職員が目にする機会は多くある。長年勤務の職員が多く、理念の大本である「安全、安心にお世話します」を念頭に、職員全員が同じ方向性を持ち支援にあたっている。マンネリとならないよう定期的に会議の中で話し合いの場を持ち、日頃の支援が理念に沿っているか振り返りの機会を作っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍により、地域のイベントへの参加、施設内のイベントに参加していただく事が出来ていない。	コロナ禍で地域の方との交流は難しい中でも、地域の方から手作りの飾り物が届いたり、庭になったゆず、柿のおすそ分けをいただきゆず湯にしたり、利用者が中心になり柿をさわし、おやつや調理に使う、花を届けてもらい事業所内に飾り皆でめでるなど、地域住民に気にかけてもらい見守られている事業所である。コロナ緩和後には、以前のように地域の方と直接触れ合うことを利用者、職員とも楽しみにしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	実習生の受け入れ等積極的に行ってきたがコロナ禍により受け入れ中止となっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍により、集合しての運営推進会議は開催出来ていないが2か月に1度活動報告や広報を郵送して、意見をいただけるよう返信ハガキを同封している。	コロナ禍にて、運営推進会議はしばらく開催されていない状況である。定期的に委員には、活動報告書、広報を郵送し一緒にはがきを同封、意見をもらえるように工夫している。書面のみで実情を中々理解してもらえない面もあるが、返信のハガキが届き内容を確認後検討し運営に反映されるようにしている。事業所としても緩和後は、直接委員が顔を合わせ事業所の運営について話し合いの場を持ちたいと期待している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	活動報告を地域包括支援センターや自治会長へ郵送し協力体制が途切れないよう取り組んでいる。	日頃から、包括支援センターとは連絡を取り合い相談に乗って貰っており顔の見える関係は築かれている。区の職員とは、保護課の担当者や介護保険更新の調査時等に適宜連絡を取り合っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束防止委員会による研修を年2回開催しており、身体拘束防止へ対しての意識向上や知識を高められるよう取り組んでいる。	虐待の防止の研修とともに年2回内部研修を実施し、身体拘束の定義は職員全員理解している。何気ない言葉かけが拘束に当たることを研修を通し皆で確認し支援している。日中は玄関に施錠はしないが、幹線道路に面しているためブザーで出入りを確認し、利用者の安全を確保している。事業所内は職員が見守る程度で自由に利用者は行動制限されない環境で過ごしている。	
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	市で開催されている虐待防止研修を施設長がリモートで受け、その時の資料を回覧する事で虐待防止への意識を高めるよう取り組んでいる。	身体拘束の研修とともに年2回内部研修を実施している。管理者は市主催の虐待防止の研修にリモートで参加し、資料を職員に配布し虐待の防止を改めて理解できるようにしている。また管理者は働きやすい職場となるよう心がけており、職員のモチベーションが上り、気持ちよく仕事ができる事で穏やかに利用者に対して接することができている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見人制度を利用されている利用者があり、分からない事があれば直接成年後見人へ相談している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に、運営規定や契約書等の説明しており利用料金や医療、看護との連携体制も細かく説明している。また不安や疑問点を伺っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍で面会を長期間中止にしており、現在も窓越しでの面会となっている。電話で意見や要望を直接お聞きしたり毎月の手紙を写真を郵送する事でそれに対する返事や意見等が多くなっている。	利用者とガラス越しの面会は可能となっており、家族面会時、受診の付き添いで事業所に訪問された時、必要な荷物を届けに来られた時と家族の訪問時には、意見、要望を伺うようにしている。毎月の「おたより」送付時にハガキを同封し意見を貰えるようにしている。貰った意見は、職員間で検討し運営に反映されるよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	1年の内、前期と後期の2回に分けて主任、副主任を中心に職員と面談を行い意見や提案を伺っている。	年2回、主任、副主任が直接職員と面談するなど意見、提案を聞く機会を設けている。月1回のフロア会議、日々の申し送り時、支援についての意見は多く出され支援に反映されている。管理者も現場に従事しており、職員の意見は大切に職員も相談しやすい雰囲気となっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度を活用し半年に1度ユニット目標と個人目標をたて向上心を持って取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍でにより外部研修には参加出来ていないがウェブ研修や職場内研修や同法人施設合同での研修を年に1度程度行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍により同業者との交流はほとんどないが同法人の研修資料を掲示するなどして資質向上を図っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面接で、ご本人、ご家族、ケアマネ、他施設職員から性格や生活歴等細かく聞き取りをしている。また要望や心配事などにも耳を傾け安心できる関係づくりをしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設見学、事前面接、契約時、電話等で不安な事や困っている事、要望を必ず聞き取りをしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	電話での問い合わせ、施設見学から入居に至る中でお話する時にご本人、ご家族のニーズや情報の把握をしてそれに伴ったサービス提供が出来るよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	洗濯物たたみや食器拭き等の家事を一緒に行ったり、食事やお茶の時間も同じ空間を過ごす事で関わりを増やし信頼関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日頃の様子や行事に参加された時の様子、体調面や精神面の近況を毎月1回お手紙と写真を郵送している。必要があればその都度電話をかけ報告すると共に意見や要望を聞いている。	コロナ禍で直接触れ合う事はまだできない状況であるが、窓越しの面会は可能であり、直接面会に来られる家族は多い。受診に付き添う家族、必要な物を揃えて届けてくれる家族、自宅に連れていきたい、墓参りをさせたいなどと、利用者の家族は大事に考えてくれており、可能な範囲で共に本人を支援してくれている。事業所としても利用者を身近に感じてもらえるよう、利用者毎に日頃の何気ないスナップ写真、様子を記入し、毎月家族に送付し家族に喜んでもらっている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	センター方式のアセスメントシートの活用やご本人やご家族、ケアマネ、他施設職員との会話の中で馴染みの人や場所を把握するよう努めている。	入所時に本人、家族、関係者から聞き取り、できるだけ把握するように努めている。入居後年数が経ち、年齢も上がってくると友人、知人も高齢となり利用者自身からも話題にのぼらない事が多くなっている。そんな中でも何気ない利用者の言葉から懐かしい場所を聞き取り、ドライブの途中に近くまで周ってみたい、家のことが心配な利用者には家を見に行くなど、利用者の思いを大切に関係が途切れないようにできる範囲で支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日々の体操やレクリエーション、毎月の行事で利用者同士で関わりが持てるよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご家族から相談、要望等があれば出来る限りの支援、協力を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で会話から希望や思いの訴えがあった場合、ケース記録に記載している。その内容を職員間で情報共有してカンファレンスで対応方法を検討している。	入居前に自宅訪問して事前調査票を基に本人、家族の思いや意向を詳細に確認している。また家族からもセンター方式シートに本人、家族の思いを記入してもらうことで、暮らし方の希望や人物像を把握している。日々の生活から見えてくる様子や態度、意向など、新しい気付きは記録に残し、全職員で共有している。	
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人やご家族の会話の中から生活歴や馴染みの暮らし方、サービス利用までの経過を把握出来るよう努めている。必要があれば前任のケアマネや他施設職員からも情報提供していただいている。	入居前に確認した情報と家族からもセンター方式のシートを記載してもらい、アセスメントを実施して一人ひとりの暮らしや生活歴を把握している。前任のケアマネージャーや事業所からも情報を提供してもらい、環境の変化の重要性を受け入れ、入居後の生活が不安なく自分らしく暮らせるように取り組んでいる。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者個々の体調の変化や気づきなどを必ずケース記録や申し送りノートへの記載、また口頭での引継ぎを必ず行い、情報共有、把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人、ご家族の意向を踏まえてケアカンファレンスを行い、担当職員、計画作成担当者を中心に現状に即した介護計画を作成している。	本人、家族の意向を踏まえ、介護計画作成者と居室担当者が介護計画の原案を作成し、カンファレンスにて全職員からも意見をもらい、ケアマネージャーが最終確認している。3ヶ月毎に居室担当者がモニタリングを実施し、介護計画は6ヶ月毎に見直し、現状に即した介護計画を作成している。コロナ禍で家族の参加は難しいので、電話にて報告して郵送している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子や気づきを小まめにケース記録に記載している。申し送りでも必ず引き継ぐ事で情報共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人やご家族の、その時のニーズや状況に合わせてその都度、臨機応変に対応できるよう職員同士でミーティングを行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍の為、ボランティアの受け入れや地域のイベントへの参加は出来なかった。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	毎月2回、協力病院の医師が往診に来ている。要望があれば昔からのかかりつけ医の受診も対応している。	入居後は協力病院の医師による往診にて、必要な診察を受けている。かかりつけ医の受診も可能である。週1回訪問看護師が状態の観察を行い、24H対応をしている。月2回の往診時の前に訪問看護経由で医師と連絡を取り、受診対応する仕組みができています。処方薬も薬局が届けてくれる。状態に応じて専門医受診の対応もあり、安心できる医療体制が整っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎週、訪問看護を受けており、小さな日々の変化や体調不良等を伝え指示を仰げる体制を整えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が安心して治療を受けられるよう医療機関へ迅速に情報提供している。退院後も相談員と早い段階から情報共有して職員同士話し合いを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りケアの指針を作成しており、契約時に事業所で出来る事を説明し看取りケアを希望された時に同意書にサインをいただいている。ご本人、ご家族、医師、看護師、職員で連携を図れる体制を整えている。	入居時に「重度化対応、終末期ケアの対応方針」について説明し同意を得ている。本人、家族、医療、職員との連携を図り、利用者、家族の安心に繋がる協力体制を整えていく方針である。職員は看取りケアの研修にも参加しており勉強会も開催している。本人、家族の思いに寄り添い終末ケアの経験もある。本人の状態に応じた病院や施設入所の推進支援も対応している。	
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故発生時に備えてマニュアルを整備し周知徹底を図っている。	急変時や事故発生時のマニュアル、症状別緊急時対応の一覧が整備されており、ホールの目のつく場所に設置されている。定期的に見直しを実施して急変時、事故発生時の対応を身に付けている。AED、心肺蘇生の実技研修も定期的に行い全職員は修得している。ユニット同士の協力体制も整備されている。	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に、地震、火災、水害を想定した避難訓練を開催している。地域との協力体制の構築は出来ていない。	年2回昼夜を想定した避難訓練を実施している。マニュアルの整備、消火訓練、避難経路も場所も理解している。また定期的に、地震、水害を想定した避難訓練も開催している。自治会と災害時対応の情報を共有していく方針である。防災リュック、ヘルメット、懐中電気、備蓄品や食料も整備されており、いつでも持ち出せる場所に設置している。利用者情報の整備もされている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者一人ひとりの性格を把握して、その方の気持ちに寄り添った言葉かけや対応をしている。	利用者一人ひとりに合った言葉かけや対応、距離感にも配慮しておりプライバシーの確保はなされている。不適切な場面が見られた時はその場で声かけし改めるよう注意している。全職員は一人ひとりの人格を尊重し、その人の気持ちに寄り添った対応を行っている。日々の記録や個人情報の管理も責任ある取り扱いを行なっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員から積極的に話しかけ、利用者のその時の気持ちや要望を聞きだせるよう思いに沿った生活を送っていただけるよう対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	毎月の会議でまず業務優先になっていないかの確認をしている。その時に必要があればその都度業務内容の改善を行い利用者のペースで生活が送れるよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	好みだった物をご本人、ご家族にお聞きしその方らしい身だしなみが出来るよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	コロナ禍以前は外食、現在は出前を時折り入れ食事を楽しめるようにしている。また普段から食事の準備や片付けを出来る事は職員と一緒にいたり、畑の野菜と一緒に収穫したりしている。	献立は利用者の嗜好や栄養バランスにも配慮して職員が毎週作成している。食事の準備や後片付けは利用者一人ひとりの能力に応じて行って貰うようにしている。外食や出前、行事食などの楽しみのある食事も定期的に企画したり、畑で採れた野菜を調理して、食する喜びを醸し出している。おやつの時間には色んなデザートを利用者と共に作り楽しみの時間となっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	飲み込みや咀嚼力を把握して食事形態、トロミ等個々に合った対応を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	利用者一人ひとりに合った方法で毎食後口腔ケアを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	職員皆が利用者一人ひとりの排泄パターンを把握している。排泄チェック表をもとに羞恥心に配慮した排泄介助を行っている。	排泄チェック表を活用して一人ひとりの排泄パターンを把握し、トイレで排泄を基本としている。利用者個々の能力や習慣、身体状態を理解し、さりげない声かけや羞恥心にも配慮して、全職員が統一した支援方法を修得している。リハビリパンツやパット類は安易に使用せず、使用根拠を本人、家族に確認のうえ使用するようになっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日日課として体操を行い、食事面で野菜を多く取り入れたり、小まめに水分摂取を確実に出来るよう配慮している。必要があればその都度訪問看護看護師に相談している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	ご本人の意思を確認して同性介助、特定の職員による介助の希望に応じている。肌の状態に応じたボディソープ等の利用へも配慮している。	週3回、午後入浴を基本としている。希望があれば時間帯や同性介助など柔軟に対応している。浴室内は適切な室温で補助具も整備され安全に入浴できる環境である。個別対応の入浴なので寛いだ気分でゆっくりと入浴ができ、季節に応じてゆず湯や菖蒲湯など入浴を楽しめるようになっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	趣味の折り紙、塗り絵、パズル、紙工作等が出来るスペースや物を常に確保している。入眠の際には明るさや室温を好みに合わせ対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬手帳やお薬カードで副作用を確認している。分からない事、不安な事があれば医師、薬剤師、看護師に相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	得意な事、仕事歴を把握して出来る事を無理なく出来るようお願いしている。別のユニットの利用者様と関わる機会も作り気分転換を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍の為、外出出来ていない。	年間行事計画は作成しているがコロナ禍で計画通りの外出は難しい状況であるが、季節毎のドライブ、花見、紅葉等の外出は行っている。天気の良い日は玄関先で日向ぼっこしたり、散歩に出かけたり、施設内にある畑で作業したりと外の空気に触れる機会を持ち気分転換を図っている。外出時に撮った写真や日々の生活の様子を写真に撮り、元気で楽しく過ごしている写真とお手紙を添え、家族にも配布している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	コロナ禍の為、買物へ出かける事は出来ておらず、金銭はほとんどの方がご家族が管理している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者様宛ての手紙や電話があれば必ずお渡ししている。電話をかけたい希望があればその都度対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者様と職員と一緒に作成した季節を感じられる飾り付けをしている。不快な臭いがしないよう定期的に換気をしたり消臭スプレー等使用している。	共有空間は明るく広く、日当たりのよい窓際には畳の場所があり、椅子やテーブルを置いたり所々にソファを置き、一人ひとりが好きな場所で寛げる空間となっている。利用者と共に創った作品や季節の装飾品は通路の壁に飾り楽しまれている。施設内は体感温度に合わせた空調やオゾンの空気清浄機を設置しコロナ対策にも配慮している。常に職員が居り、お話ししたり見守ったりと目配り気配りがあり安心して過ごせる生活の場となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	必要な方には広いスペースを活かし独りになれる場所と時間を設けており、その他では気の合う利用者様同士でテーブルの配置をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの物や好みの物を入居時に持ってきていただいている。居室はご本人が過ごしやすいよう相談しながら配置している。	入居時には馴染みの物の持ち込みは自由である。本人、家族の意向を大切に、本人が安心できる居室作りとなっている。居室のドアには名前を貼ったり、季節の花を折り紙で作って飾っている。部屋の掃除は個々の出来る能力を活かしながら、職員と一緒にしない自立した生活が送れるように支援している。季節の衣替えや整理整頓は本人と担当職員が一緒に行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者様がトイレの場所や季節が分かりやすい飾りつけや表示をしている。		